

令和8年度

えひめ環境大学

変貌する地球と 私たちの未来戦略

第1回

7/11 (土)

PFASによる
環境汚染問題

第2回

7/18 (土)

プラスチック
資源の有効活用

第3回

8/1 (土)

地域の絶滅危惧種
と生物多様性

第4回

9/5 (土)

暮らしや産業と
生物多様性

第5回

10/31 (土)

ミライの食、
培養肉とは？

開催時間

14:00~16:00 (全5回共通)



先生に直接質問できる
チャンス！最先端の
環境を一緒に学ぼう！



全5回

参加無料・事前申込制

申込はこちら！！

スマホで簡単申込

URL

<https://logoform.jp/f/Psvt1>



主催



愛媛県

共催



愛媛大学

募集案内

募集対象 受講を希望する県内にお住まいの方

募集定員 各回90人（先着順）

募集締切

第1回	令和8年7月6日（月）
第2回	令和8年7月13日（月）
第3回	令和8年7月27日（月）
第4回	令和8年8月31日（月）
第5回	令和8年10月26日（月）

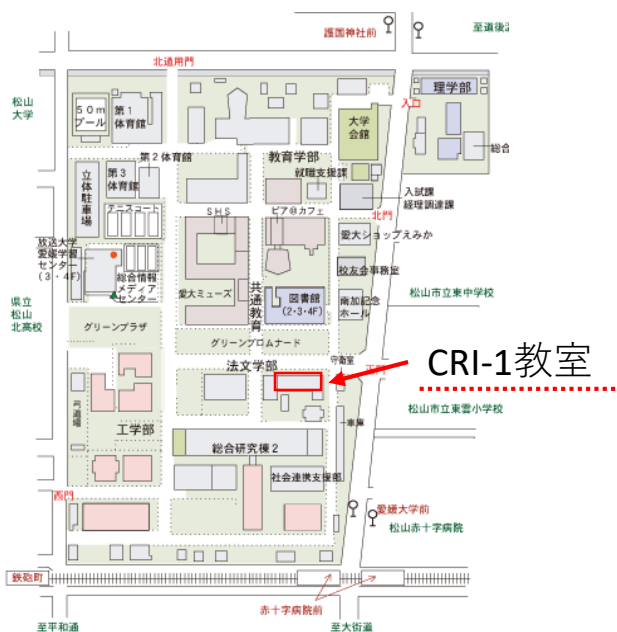
- 先着順に受講者を決定し、受講の可否についてご連絡します。
- 個人情報適切に管理し、本事業以外の目的では使用しません。
- 4回以上出席された方には修了証書を交付します。
- えひめ環境大学は、学び舎えひめ悠々大学（愛媛県生涯学習センター実施）の対象講座となります。

開催場所

愛媛大学 城北キャンパス

（松山市文京町3番）

共通講義棟B 1階 CRI-1教室



※会場に駐車場はありません。公共交通機関等をご利用ください。

お問い合わせ

愛媛県 環境・ゼロカーボン推進課
TEL 089-912-2347（平日8：30～17：15）
FAX 089-912-2345
Email kankyau@pref.ehime.lg.jp

講義内容・講師紹介

第1回 野生生物を取り囲む窮屈な環境—PFASによる環境汚染問題を考える—

近年、PFASと総称される有機フッ素化合物による環境汚染が、世界的な課題として注目されています。PFASは水や油をはじく性質をもち、私たちの身の回りのさまざまな製品に利用されてきましたが、その一方で分解されにくく、環境中に長く残留することが問題となっています。こうした汚染の影響はヒトにとどまらず、河川や海洋、さらにはそこに生息する野生生物にも広がっています。本講義では、科学的な知見を元に、PFASとは何かをわかりやすく解説するとともに、世界における環境汚染の実情、日本の野生生物における汚染の実態、そして今後私たちが向き合うべき課題について考えます。

【講師】愛媛大学先端研究院沿岸環境科学研究センター 准教授 野見山 桂 氏

2008年3月 熊本県立大学院 環境共生学研究科 博士後期過程環境共生学専攻修了（環境共生学博士）
One Health の理念の下、ヒトや野生動物、環境を汚染する様々な環境汚染物質の分析法開発とその曝露リスク評価法の開発に取り組む。近年では有機フッ素系化合物（PFAS）や医薬品類及び生活関連化学物質（PPCPs）等、比較的極性の高い化学物質を対象に体内動態の実態と影響について研究を進めている。
また、百聞は一見に如かずをモットーに、ライフワークとして世界各地を訪れ環境に関わる野生動物や自然の写真を撮影しており、それらを用いた環境教育・自然保護普及活動にも取り組んでいる。
2025年 第32回環境化学論文賞, 日本環境化学会
2020年 大会長奨励賞, 室内環境学会学術大会
2018年 14回三浦環境賞奨励賞, 愛媛県
2016年 Photographer of the Year, Sony World Photography Awards
2009年 日本環境毒性学会・バイオアッセイ研究会・奨励賞 他

第2回 プラスチック資源の有効利用と化学物質管理のはざままで

近年、プラスチック廃棄物問題は世界的に大きな課題となっています。日本ではプラスチック資源循環戦略が策定され、国連ではプラスチック条約の策定に向けた国際交渉が進められています。一方、プラスチック製品にはさまざまな添加剤が使用されており、その一部には有害性が指摘されているものもあります。このため、使用済み製品をリサイクルする過程で、これらの化学物質が再生プラスチックに混入する可能性が懸念されています。本講義では、プラスチック廃棄物をめぐる最近の動向とともに、資源循環と化学物質管理の課題についてわかりやすく紹介します。

【講師】国立環境研究所資源循環領域 上級主幹研究員 梶原 夏子 氏

2003年3月愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程修了。愛媛大学沿岸環境科学研究センター助手を経て、2006年4月に国立環境研究所入所、現在、国立環境研究所 資源循環領域 上級主幹研究員。

残留性有機汚染物質（POPs）等の有機分析が専門。2006年入所以来、製品や循環資源に含まれるPOPs含有実態や製品ライフサイクルにおけるPOPsの挙動に関する研究に携わる。ストックホルム条約BAT/BEPガイドダンスやバーゼル条約POPs含有廃棄物適正管理技術ガイドラインの策定ワーキンググループのメンバー。

第3回 地域の絶滅危惧種を守り、地球の生物多様性を守る

本講演では、愛媛県の身近な農業水路や小河川、ため池を舞台に、絶滅危惧種の保全に取り組む研究を紹介します。わが国を象徴する美しい里山の農地では、区画整備や水路のコンクリート化が進む一方で、取り残されるように残った土水路が、二枚貝であるマツカサガイのような希少な淡水生物にとって重要な生息地となっています。また、その二枚貝の鰓に産卵するという特異な生態をもつ小型淡水魚ヤリタナゴは、愛媛県では人為的に持ち込まれた国内外来種アブラボテとの競合や交雑により、遺伝的独自性が損なわれ、個体数を減らし絶滅の危機に直面しています。本研究では、こうした種間関係を丁寧に解き明かし、多様な主体が連携して適切な維持・管理を行うことで、地域固有の生物を守る方法を探ります。地域の小さな自然を守ることは、生物多様性の保全という世界的課題にも直結します。本講演を通じて、足元の自然を見直し、未来へつなぐ意義を考えます。

【講師】愛媛大学大学院理工学研究科 教授 畑 啓生 氏

京都大学総合人間学部卒業、東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）京都大学での博士研究員を経て、近畿大学農学部講師、愛媛大学大学院理工学研究科助教、准教授、教授。専門は生態学で生物の種間関係や多種共存の仕組みを研究しています。フィールドは松山のため池や農業用水路や河川から、世界のサンゴ礁、アフリカの古代湖、アマゾン川まで。



講義内容・講師紹介

第4回 わたしたちの暮らしや産業と生物多様性

わたしたち人類（ヒト）はこの地球の生物多様性を構成する一員であり、わたしたちの豊かで安全な暮らしは、生物多様性がもたらす様々な恵みに支えられています。一方で、地球の生物多様性は、わたしたち人類によって、これまでにない速度で失われつつあるのに、わたしたちは、日常生活の中でこのことを実感することがほとんどないのではないのでしょうか。この講義では、わたしたちの暮らしや産業と生物多様性の関係について改めて認識するとともに、危機が迫っていると言われる生物多様性が今どういう状況にあるのか、どうしたらわたしたちはそれを自分事として捉えて保全に向けた行動を起こすことができるようになるのか、国の施策や世界の動向等も解説しながら、一緒に考えていければと思います。

〔講師〕 環境省 中国四国環境局 生物多様性保全企画官 秀田 智彦 氏

1984年東京農工大学農学部環境保護学科卒業。同年環境庁（当時）入庁後、北海道から九州まで各地の国立公園や野生生物の保護管理の現場に長年勤務。インドネシア林業省生物多様性保全アドバイザー、環境調査研修所次長、復興庁参事官（原子力災害復興、災害廃棄物・環境担当）、近畿地方環境事務所長、中部地方環境事務所長等を経て定年退職し、2022年から再任用で現職。「私たちの生存基盤である生物多様性の重要性とその危機的状況を、市民・事業者等一人一人の方が自分事と認識して具体的な行動を起こす」にはどう働きかけていくべきか思いを巡らす日々。

第5回 ミライの食、培養肉とは？

世界の人口は2050年には97億人に達し、人口増加と食生活レベルの向上によりタンパク質の需要と供給が崩れる「タンパク質危機」が起こると予想されている。また、ウシのげっぶはメタンガスを含むため環境負荷が高く、また、動物愛護の観点からも家畜の削減が望まれている。これらの課題を解決する新しい食品として、細胞から作られた「細胞性肉（培養肉）」が期待されている。しかし、これまでの細胞性肉は、植物由来の代替肉に細胞を混ぜたミンチ状であり、肉の複雑な組織構造や味、香りを再現することは困難であった。

我々は、3Dプリントを活用することで従来の培養肉より本物の畜肉に近い培養肉をテーラーメイドで作製できる技術を開発した。本講演では我々の研究開発だけでなく大阪・関西万博での展示と社会実装に向けた取り組みについても紹介する。

〔講師〕 大阪大学大学院工学研究科 教授 松崎 典弥 氏

鹿児島県生まれ。2003年に鹿児島大学で博士号を取得。2003年より大阪大学にてポスドクとして研究活動を開始。2004年ルンド大学の客員研究員。2006年大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻に助教として着任。2015年准教授、2019年教授に昇任。2008年から2011年、2015年から2019年までJSTさきがけ研究員（兼務）。大阪科学賞、文部科学大臣表彰若手科学者賞など23の賞を受賞。研究テーマは、再生医療や創薬への応用を目的としたバイオマテリアルと組織工学。発表論文数は240報、h-indexは51。

培養肉が**愛媛県総合科学博物館**で
展示されます！

〔展示期間〕
10月14日～11月15日

大阪万博でも展示された実物の培養肉をご覧に、
ぜひお立ち寄りください！！

えひめ環境大学



たくさんのご参加
お待ちしております♪